
Cameraman **直人の旅**

迦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Camera man 直人の旅

【Nコード】

N9658C

【作者名】

迦月

【あらすじ】

直人は今、忌まわしい記憶の残る故郷を離れ、『友を殺す』という目的を果たす為にカメラをまわす

プロローグ

僕は、ただ 旅に出たかったんだ……。

父さんの形見のカメラのモーセと、バイクのディム、そしてあいつと一緒に。

僕は、世界を見たかった。

一緒に世界を見て回りたかった。

まさか、こんな形で旅を始めるなんて、思わなかった……。

待ってるよ。俺が必ず……。

朝霧の丘

まだ空が白ける前の、薄暗がりにも包まれた静かな町にひとつのエンジン音が鳴り響いた。

それから数分後。

ほんのりと空の色が変わったところ、一台のバイクが速度を落としながら、小高い丘の上に現れた。

その丘からは、直人の生まれ育った町を見渡すことができる。この丘は直人が小さな頃からの、秘密の場所だった。

朝霧に包まれた町は、静寂に包まれて、太陽が昇るのを待っている。その風景を心に焼き付けるかのように、持って来たカメラでパシャリと、一枚だけ撮った。少し町を眺めてから、バイクの荷台に括りつけた荷物の中にカメラをしまつて、もう一度だけ町を見た。

「直人、本当にいいの？」

直人は、その声に向かって頷く。
もう心残りはない……。

「さよなら。」

直人はバイクを走らせ、17年間住んだこの町を後にした。

丘からバイクで走っていくと、広い道に出た。

「これからどこ行くの？」

丘の上で問い掛けて来た声が言った。

「どうしようか？僕は目的を達すればどこでもいいんだけど。ディムはどこか行きたい所、ある？」

直人はバイクに向かって答えた。

「別に無いなあ。行きたい所。」

さらりと言うディムに苦笑しながら、直人は答える。

「それじゃあ、気ままに行こうか。」

そう言いながら、直人はアクセルを開けていき、スピードを上げた。

このバイクの名前はディム。

3年前

前の持ち主に捨てられ、気がつけばゴミ処理場の山のような粗大ゴミ置場にいたところを直人に拾われた、ある意味幸運なヤツである。

捨てられたバイク

3年前

デイルは前の持ち主に捨てられ、気がつけばゴミ処理場の山のような粗大ゴミ置場にいた。

いつスクラップにされるか分からない恐怖と、自分が捨てられたという事実……。

誰かが助けしてくれるという希望も無く、ただ絶望だけが先にある日々。

そうして、全てを諦めていたデイルだったが、ある日、思いもかけない事が起こった。

雪が溶けてすっかり春になった頃、孤児院の見学会があった。

その見学会が終わるときに、案内をしていたゴミ処理場の所長が

「まだ使える物が沢山捨てられていてね……よかつたら、気に入った物を持って行っていいよ。」

と言ったらしく、孤児院の子達が、何か使えそうな物は無いかと探

しに来た。

「君……寂しいの？」

不意に声をかけられて、まさかと思いながら前を見ると、そこに一人の少年が立っていた。

少し茶髪の混じった黒髪と淡い緑の目が印象に残った。だがよく見ると、その少年の左目には何も映っていない。

左目……見えていないんだ。

そんなこと思っていると、少年がまた話し掛けて来た。

「僕と一緒に行かない？」

嬉しかった。

もし、自分が人間だったら泣いていただろう。

諦めていた奇跡が起こった事に感謝した。

その返事に、迷うことは無かった。

「行（生）きたい……」

そして、当時14歳だった直人にこの命を救われた。

直人は孤児院に帰った後、専門書を片手にディムを修理し、町のいろんな所を走り回って遊んだ。

一年経つ頃には、お互いをの事を『相棒』と思えるほどの仲になっていた。

それからも、一緒に町の風景を写しにあちこちに出掛けたり、たまに町を出て海や山まで写真を撮りに行った事もあった。

そして、それは今も

野宿

何も無い平坦な道。

周りには家が一つもない。

あるのは春を控えた野原と所々に立つ木と、舗装のされていない道だけ。

辺りは夕日で朱に染まってきている。

直人とデймは、町を出てからノンストップで走り続けて、次の町まで半分近く距離を稼いだ。

「ねえ、直人。」

「ん？」

「家、見当たらないね。」

「うん。」

「このままだと野宿だよ。」

「……うん。」

「どうするの？」

「……」

「そろそろ日が沈むけど、野宿するなら準備した方がいいよ？」

「そうだけど、めんどくさいな。」

「おいおい」

「まあ、いいや。デйм、ここらへんで野宿しよう。」

「……切り替え早いね。」

「まあね。」

「……一応、言っとくけど、褒めてないからね。」

「えっ!?!? そうなの?」

(分かってなかったんだ…)

直人は道をはずれて、自生していた背の高い木のそばにディムを止めた。

「ちよつと待つてて。焚火の枝拾ってくるから。」

「はいはい。」

直人は、辺りに生えていた低い木に歩いて行った。

この地方は冬にあまり雪が降らないため、秋に落ちた木の枝がほとんど腐ること無く、落ちたままになっている事が多い。

その落ちていた枝を拾って、ディムの所に戻ったあと、焚火の準備を始めた。拾った枝の半分くらいを一箇所に集めて、ねじって火をつけた新聞紙をその下に入れた。

火の上に燃えやすい枯れ葉をかぶせて風を送り込むと、火がパチパチと燃え出した。

ふと辺りに目をやると日が沈み、暗くなって来ていた。

「できた？」

「うん。なんとかできたよ。孤児院の野外活動、ちゃんとやってよかった。」

「ふーん。それより何か食べたなら？朝からブつとうしで走ってたから、なんも食べてないじゃん。」

「そういえば…(グウ…)…お腹減った。」

「やっぱり。」

直人は荷物の中から、昨日の晩に孤児院の台所からくすねて来た食料の袋を引っ張り出した。

その中からパンとソーセージを2本取り出す。

ソーセージに串を刺して焚火で焙ってパンと一緒に食べた。

食べ終わってから、持参したポットでお湯を沸かして、お茶の粉末を入れたコップに注いで、星が出始めた空を見上げる。
お茶を飲んで、直人はようやく一息着けた気がした。

「さてと、そろそろ……」

そう言つて、直人は荷物の中にしたまったカメラを取り出してファインダーを覗いた。

「モーセ、起きてる？」

ディムが言つと、カメラから寝息が聞こえた。

「(… z z z … z z z)」

「……まだみたい。」

直人が呆れて苦笑しながら言う。

「……しようがないなあ。」

寝息を立てるモーセのファインダーを覗きながら、日が沈んだ後の橙色と夜の藍色のグラデーションにレンズを向けた。

そして、ピントを合わせてシャッターを降ろす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9658c/>

Camerman 直人の旅

2010年10月24日02時10分発行